

41 『傷寒雜病論』における卓越した考注

郭¹⁾ 秀梅・加藤²⁾ 久幸

漢代に成立したいわゆる『傷寒雜病論』については、歴代の中日両国学者による解釈が盛んに試みられていく。したがって、原文に基づく注釈文は遥かに豊富になっている。にもかかわらず、『傷寒雜病論』の奥深い内容の難解さは枚挙にいとまがない。本文では同時代に、中国学者が及ばないほどの江戸学者の優れた考証例をあげ、両国の同好の士に贈る。

『傷寒論』平脈法の「今月之内」についての諸注は牽強である。しかし、方有執が「誤りの疑いあり」と指摘している。森立之『傷寒論攷注』には「今月」の二字は、おそらく「分肉」の訛りである。六朝以後、肉が月に誤り、更に、今が分に誤った。このように、「分肉之内」とすると、その義が明らかなる、と言っている。

さて、肉と月の訛の例が明・方以智『通雅』にも見ら

れる。卷十一・天文・『淮南』覚冥訓「羿請不死之薬于西王母、嫦娥竊以奔月」。方以智注「奔月は空肉に作るべきだ。つまり、死んだ畜の肉に薬をぬって、生き返ることができるというのだ。後世、月宮に入ったとの誤伝が続いている」。一字の正しい考証により、千古の美しい物語を道破された罪になるだろうか。

「鼻鳴乾嘔者桂枝湯主之」の鼻鳴について、一般的に鼻塞而息鳴と解釈している。森立之の詳細な考証によると、鼻鳴は『傷寒論』のほかに、『万葉集』と『請病源候論』にしか記載されない極めて稀な言葉である。『万葉集』には鼻鳴を波奈比、噴嚏と訓する。『和名類聚鈔』「玉篇」云、嚏、丁計反。波奈比流、噴鼻也」と、中日字書を考察した上で、鼻鳴が「久左米(嚏)」を指していることが証明され、慣用になる錯誤を匡した。

『金匱要略』には「風中于前、寒中于暮」がある。さまざまに解釈されているが、意味が通らない。後藤幕庵が「前与朝点画近似、或誤認朝字作前」と述べている。更に、伊沢蘭軒が「前疑朝訛。朝篆体作朝。前篆体作前字、字形近似而訛」と明言した。『魏彭城武宣王妃李氏墓志』

では朝の俗体が翰になり、『隋閔明墓志』では前の俗体が前になる。「翰前」二字の字体が相似するので、共に誤るのは有り得ることである。清末学者の陸淵雷が「中前中暮、文意不明。『金鑑』以為早、亦於詁訓無徵」と遺憾の意を表わしているが、江戸学者の訓釈ですっかり疑念がとけるだろう。

『傷寒論』太陽病「此本有寒分也」について森約之は「分字、寒字半下化裂誤衍者。『玉函』及『翼』無分字、可從正也。『総病論』水氷也地裂。也字、地之誤衍在上者、与此寒分同例」と論ずる。

『金匱要略』には「脈脱入臧則死、入府即愈、何謂也」については多紀元堅、喜多村直寛は脈脱の間違いを疑っている。山田業広は脈が血気の誤写で脈になり、更に脱が脈の形誤で衍文である。すると、「血氣入臧則死」が前文の意に対して一番相応しい注釈である。

これらの例から、江戸学者達が深く校讐学知識を持っていたことが裏付けられる。清代著名な考証学家俞樾の『古書疑義举例等七種』の一字誤為二字例・二字誤為一字例には類似の例をよく挙げてゐる。例えば『孟子』公孫

丑篇「必有事焉而勿正心」は『日知録』の倪文節の説によると、「必有事焉而勿忘」に作るべきである。即ち「正心」が「忘」字に分裂したものである。また、『礼記』檀弓篇「従母之夫舅之妻、二夫人相為服」がある。「夫」字が「二人」の誤合であり、衍文でもある。

古書が古い時代から伝わってくる過程に魯魚の訛は免れず、疑いもなく信じ込むのは危うい。間違えたまま解釈すると、限らない害を残す。

¹⁾ 順天堂大学医史学研究室・北里研究所東洋医学総合研究所
医史学研究所、²⁾ 中国伝統医学研究所